

敦賀市五幡の「蒙古来攻伝説」について

—その生成変化と現在—

塩瀬 博子

一 はじめに

日本海に面した福井県には、複数の渡来系伝説が伝わっており、それはこの地が古来外に向かって開かれ、異文化接触の舞台を担ってきたことを示している。敦賀という地域に限ると、都怒我阿羅斯等の説話¹⁾、また新羅系の人々を受け入れ、融和に至った痕跡を示す白木という地名や、白城、信露貴彦神社の存在がある。しかしその一方で、異文化を受け入れてきた敦賀湾周辺には十三世紀の「蒙古襲来」ではなく、それ以前に起こった異賊来攻を指す「蒙古来攻伝説」が点在する。この伝説は柳田國男の『日本伝説名彙』（柳田一九五〇）に載せられている。「傳説の拠り所となつて居る個々の地物を、分類の目安に立て」（柳田一九五〇 vi）たもので、「木の部」「石・岩の部」「水の部」「塚の部」「坂・峠・山の部」「祠堂の部」の六つに分けられているが、そのうちの「塚の部」に次のようにある。（柳田

一九五〇 三六五）

ここにある耳塚は、聖武天皇二十年に蒙古来寇のとき、鉄輪その他の賊の首を埋めた処といい、武内刀禰が鉄輪を追回した岩を追岩、首を取った処を首取坂という。（南越民俗 二）²⁾ 福井県敦賀郡東浦村五幡（現敦賀市）

この戦いの場は五幡と隣村である江良の村境と伝えられている。処刑場であった耳塚は地元の人から「くびと」と呼ばれる。夜はこの辺りを通るな、とされてきた。異国の兵士たちは吊われることなく、屍は千年以上に渡り放置されたという。そして「塚の部」の同頁にはこれと似た伝説がもう一篇記載されている。

旧和気郡新浜村飛地の北山という処にあり、往古越智益躬^{ますみ}、播州蟹坂において外寇の賊將鉄大人とその従者を誘殺し、その

従者の耳を切り埋めた処というが、今はその所在明らかでない
と。(伊予温故録) 愛媛県温泉郡

兵庫県南部の播州明石市にある稲爪神社にはこれを裏付ける
ような謂れが伝わっており、神社の由緒によると、推古天皇の
御代、三韓が鉄人を大将として八〇〇〇余人来攻した際、伊
予国小千益躬が勅命を受けて播州明石にて迎え討った。その際
祈願した大山祇大神のおかげで稲妻稲光の中で鉄人を平らげた
ので、その神が現れた地に社を建てた、⁽³⁾ というものである。

これらの伝説は記紀や続日本紀には記録が見当たらず、歴史
上では真偽のほどはわからない。しかし敦賀も明石も、いずれ
も海の道の要衝にあたることから、その背景があつて生まれ、
地域に継承されてきた伝説だと言える。

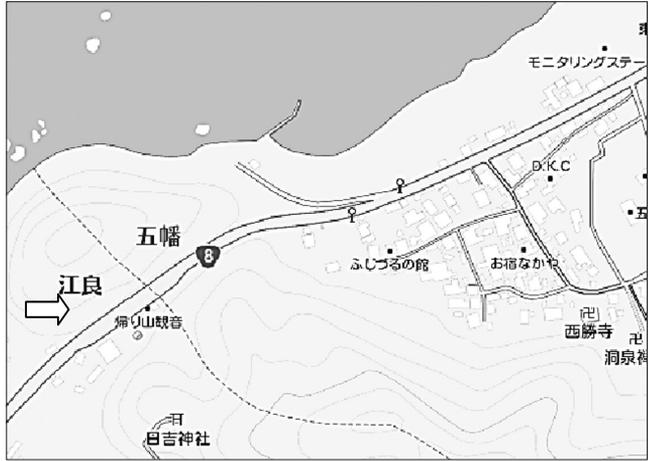
『越前若狭の伝説』⁽⁴⁾の編者・杉原丈夫はその著書のまえがきの
なかで、柳田國男の『民間伝承論』のなかの四つの伝説の特徴
をあげた後、「一口にいえば、伝説の一端は歴史に接し、他端は
文学につながる。いわば事実と創作、真実と虚構の中間にある
信仰的領域である」(杉原一九七〇 二)と述べ、史実でない
としても、ある時代に伝説が発生し、人々がそれを信じ、今に
至るまで言い伝えたこと自体が明確な史実である、と記してい
る(杉原一九七〇 五)。人がその伝説に意味を見出せない
したら、言い伝えていく必要もなく、消えていくしかない。そ
こには歴史や政治の表舞台には立たない普通の人々の生活・暮

らしのなかで、その時代の彼らの解釈によつて信じられ、生き
ながら生きてきたものが存在している。このような視点に立つて、
「真実と虚構の間」にある伝説と、それを巡る地域社会と人々に
焦点を当てて、以下のように論じていきたい。

この伝説には盛衰の跡が見受けられ、時を経た現在、新しい
言説が付加されて再び変化していることが観察される。生成か
ら現在までがどのようなものであるのか。そしてその背景にはどんな
社会事情と地域における個人の人々、担い手との関連があるの
かを文献と語りによつて探る。湯川洋司は、伝承母体のなかの
集団と個人について、そこに帰属する一個人が抱える個別の事
情や行動により、民俗が大きく様相を変えたり、消滅したりす
ることを自覚する必要がある。すなわち個人々々の次元での民俗
把握が、現実社会の理解の上で重要な意味を持つ、と述べてい
る(湯川一九九八 十五―二五)。また小池淳一は、個人の
保有する伝承の意味を考える必要性を説き、伝承への認識設定
において、「個人に焦点を合わせて伝承の継承・解釈・創造の様
相をとらえること」(小池一九九八 九三―九七)を主張し
ている。これらの言を受け、当伝説と個人とのかかわりに注目
をしながら、伝説を巡る変化と、その現在の姿をとらえたい。

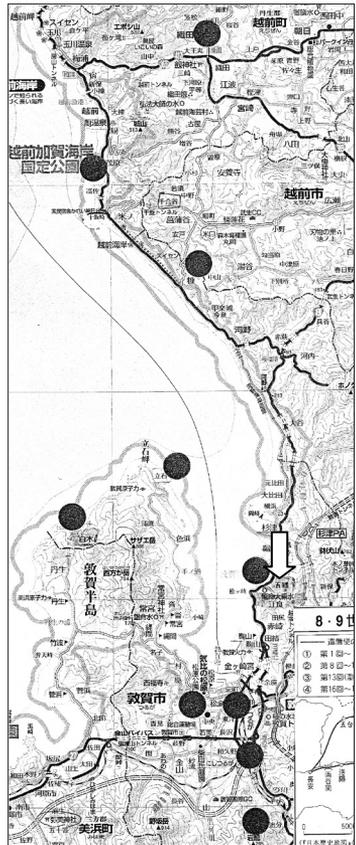
二 五幡の概況

五幡は敦賀市内から北東約七キロメートル、敦賀湾の東岸に



↑ 地図1 五幡と江良村地図

→ 地図2 敦賀湾地図
 (●は「蒙古来攻」関連伝説地、
 矢印が五幡)



位置する戸数六十五戸、人口一六一一人の海辺の集落である。南に江良村と隣接し、伝説の舞台はその村境にある（海岸一帯と西側帰り山観音附近）。

この東浦地区は古来より製塩が盛んな地であり、江戸時代には塩浦とも呼ばれていた。また古くから交通の要所であり、都から北陸へ通ずる人と文化の往来筋であった五幡は、歌にも多

く詠まれてきた。

三 「蒙古来攻」伝説に関する文献と口碑

杉原による『越前若狭の伝説』（杉原編一九七〇）には、蒙古来攻に関する伝説が計十五編程載せられており、伝説地域は敦賀湾一帯と同湾を脱した越前の海岸部や内陸部の神社記録にまで及んでいる。

ここでは、伝説の生成や変遷、特徴を見ることを目的として、「五幡」の名称が表れる文献と口碑を合わせて七点紹介するが、文献の内、【文献六】『敦賀郡神社誌』（石井左近編 一九三三）は冒頭で紹介したので省略し、表一でのみ取り扱う。

三・一 「五幡」の地名が表れる文書、寺社の史料と口碑

【文献一】『橘刀祢系図卷上』（二五五七）

この文献は『越前若狭地誌叢書 続巻』に記載されているが、杉原によればこの史料は敦賀市江良の刀祢家に『橘刀祢系図』上下二巻が秘蔵されていたもので、巻上では氣比神宮縁起と刀祢家の先祖武内刀祢の功業が語られている。本書の神話伝説は、従来の地誌・神社誌などには全く記載されていない珍重すべき内容の書物である（杉原一九七七 六四五）と、紹介されている。

…往昔三韓の蒙古我朝を亡ために、仲哀二年正月下旬の此角へ着岸す…

蒙古百万騎余、大船万艘に取乗、海上隙間なく…

氣比の海の事

箭飯海とは、角鹿浦の海を云。…又其夜櫛川浜に松原一夜に出生し、其松の枝ごとに白鷺多く留り居たるが、軍兵大勢鎧居たる様に見へければ、蒙古是を見て、周章騒て、数万艘の船をそれより押し出し、角鹿より二里ばかりを経て、東浦の磯伝、江良五幡より半里ばかり沖中に、舳艫を雙べて掛りけり。

官軍江浦陣取五幡戦場の事

去程に蒙古は角鹿の津を退散し、五幡浦の沖中に留り居て、五幡に押よすべき次第見へければ、…其時天皇武内刀祢を召て、官軍陣取見立のために江浦へ遣さるべき旨、仰付られたり。此江浦の領地、磯伝には其軍の時の古跡多し。先赤崎と江浦との境に、仏崎と云仏の相好に似たる高き岩あり。…去ば、五幡浦にて官軍蒙古と三日の合戦なるに（中略）

江浦と五幡境、東より北に相続たる山あり。…この山の頂上尾続に…五色の旗を五本立て給へり。此五本の旗本より北の見下に、其後人里いできたるを五幡浦と云。此五幡と江良との境、頸取坂の上に関逆木を蜜しくして（中略）

武内刀祢…大将鐵輪が頭を打落給ひければ、頸は坂の上に留り、骸は坂中に倒伏す。其より此坂を頸取り坂とゆい、彼坂の上頭の留たる方を頸頭とはいふなり。然るに武内刀祢彼頭を左の脇にかひこみ、右に太刀を提けて、大勢寄りたる蒙古を坂の麓海中岩の辺まで追下し給う故に、彼海中の岩を追岩と云。（中略）蒙古…早く本国へ帰らんと、数万艘の船に取乗、沖中さしてぞ漕出す。其時南より白鷺数万群がり来り、江浦五幡の上に舞いあそべば、西より不思議なる黒雲少し出て、…雷鳴電光おびたしく光渡れば…九竜一同に天より黒雲吐ければ…九竜天より海中へ飛入、死する蒙古は数知れず。（後略）

江良の刀祢家の先祖はここに出てくる武内刀祢である。この戦いで挙げた刀祢の功績がドラマティックに書かれている。勝利の要因が白鷺、竜、雷鳴電光にあることも記され、伝説に因む多数の固有名詞が登場する。

【文献二】『五幡有文書』二号文書(一六七五)

二号文書は五幡の地名由来を記述したものである。

二 五幡浦由緒

五幡浦

一 仁王四拾五代之御宇聖武天王之時ニ有 異国ヨリ日本をせめにむくり(蒙古)こくり(高句麗) 此前なる海まで押寄候、仰此所を五幡と云事ハ、聖武天王御宇天平式拾(七四八)年巳丑霜月八日之夜、村ヨリ南西ニあたつて高山夜もすからしんとうらいてん(震動雷電)して、夜明て見れば五つの幡ミねにたてり、是皆五色ニして四きの土用までをひようせり、則其時八幡大菩薩も御ようかう被成今にあとをたれ給なり、是皆八幡之御方便也、

(後略)

一 五幡浦初而当年まで八百七拾貳年

延宝三年卯九月廿日

神主 西勝寺

地元の話によると、五幡の住人による文献では、この『五

幡有文書』が一番古いものという。文書中に固有名詞の表示はない。

【文献三】『氣比宮社記』⁹⁾ 平松周家(一七六四)

平松周家は氣比社(氣比神宮)の社家から出た学者であり、この社記を九冊著した(福井県 一九九四)。左記記述は『氣比宮社記』中、第貳卷にあり、敦賀郡(旧)の主な神社の社格や由緒を述べた中に列記されている。

五幡神社 座宇五幡浦延喜式

所謂五幡神社是也

祭神一説曰八幡宮也又説曰五幡社氣比神仲哀天皇奉勸請之神祀也未勸正説

社記曰昔日蒙古將襲^ニ我國^一來^ニ宇北陸之海上^一時鹿比流^ノ山麓^ニ五^ツ旗靡揚^ルコト 數日也 筒飯浦人怪^レ之往見^ニ其濱邊^一現^ニ五之瑞雲於山上^一一群^ノ白鷺飛^レ廻海邊^一也後有^レ人語曰蒙古ノ賊遙^ニ望^レ以爲官兵群^ニ集筒飯^一浦^ニ恐怖退散也云々 其五幡之現^レ處^ニ號^ニ五幡神^一是也

(後略)

来攻時期の明記はない。伝説地の背後に連なる鹿比流山に旗が靡き揚がったこと、白鷺の群れを官兵と誤って賊が退散したことが書かれている。白鷺は氣比神宮の神使であり、その登場

による勝利という内容に、氣比社の神威が強調されている。

【文献四】『越前古名考』^⑩ 坂野二蔵（一八〇一）

作者は一七七四年生まれ。一八〇一年に古地名研究であるこの著を編んだ。篤学の士で、広く古典に通じているのみならず、国内を实地に踏査し、古老の言を聞き書きしており、考証も緻密である（杉原一九七七 二二六）。

○：其浜ニ五幡浦・江良浦アリ。此二浦ニ小山アリ。帰山と云。土俗伝云、古へ蒙古人此所迄攻来タリシニ、天ヨリ五ノ幡降り、此山ニ立、神兵顕レ戦賜ケレハ、蒙古敗レ帰リシニヨリ、帰山ト名ケ、五幡ト名クト云ヘリ。又敦賀湊ノ海辺ニ一里ハカリノ松林アリ。此モ蒙古来リシトキ、一夜ニ松数千本生シテ、数万ノ鷲其上ニ集リシカハ、白旗ノ如ク夥シク見ヘケルニ、驚テ敗レ帰ケルトモ云ヘリ。！案ニ、帰山ハ万葉集ニ詠ル歌アリ。松原ノ倉ハ日本後紀ニ出タレハ、蒙古襲来ヨリ遙ニ古シ。若其以前外国ヨリ襲来スルコトアラハ、国史ニ出ヘキナリ。此甚異奇ノ説ニシテ、拠ニ不足。然レトモ此地ニ帰山・松原ノ名ハ実ニ古ヨリ有ケルニ、附会の説ヲツクルナラン。

著者は古典や史書をもとに伝説の考証を明確に成し、当伝説の成立に関して、歴史との間を行き来しながら、土地と風物に

結びついた後世の付会であろうと結論付けている。

【文献五】『越前志抄』^⑪ 坂野二蔵 一八一四年以前

文献四の著者であり、続いてこの著作を志したが、国内遍歴での調査、資料収集中一八一四年に死去。この『越前志』は企画していた全越前志のうち、神社誌のみにすぎない、という。彼の学風は書齋での古典研究ではなく、郷土を踏査し、古記録や古老の伝説を尋ね、民俗学の領域に立ち入っている（杉原一九七七 七五八）。

増補^⑫

（五幡明神）

（前略）元比田にて大比田の西光寺和尚に聞く。仲哀天皇の御宇、蒙古攻来れる時、五幡の地にて戦あり。其時天より五本の幡下りて五幡の山に立り。蒙古此に驚いて敗す。夫より五幡と名く。

五幡より江良に越す坂をクビトと云。武内大臣、帝を負奉て此坂に上り、此所にて大に敵の首を取也。故首取と云。今クビトと云は訛也。浜に楯石あり。武内楯となして戦れしと云。其坂を帰山と云は、蒙古敗れて帰りし故に名くと云り。

五幡にて別当西勝寺に聞く。大概同じ。其幡の立たる所を幡屋敷と名て、今は江良の地なり。一説に江良との間を帰

山と云。一説は木の芽より此方の山を帰山と云。蒙古の大將の首取し故首取と云。楯石の説なし。浜にヲグリと云石あり。此をめぐりて戦ふと云り。江良の刀祢彦右衛門の説も大概同じ。幡屋敷を帰山と云説もありと云。

蒙古来攻時期は仲哀天皇時であり、文献四には記述のない戦いの様子や伝説中の固有名詞が記述されている。「西光寺和尚」、「別当西勝寺」や隣村「江良の刀祢彦右衛門」など、数人に聞き書きを行っており、当時における伝承地一帯の住民からの生きた証言記録となっている。

三・二 地元で伝わる口碑（民話）

ここでは伝説全体と地名の起源が表れている民話一を紹介する。

【民話一】「いつ色の旗」『東浦の民話集』（東浦公民館編

一九七六～七七）から

この民話集はいい資料を使わず、直接地元の人々の方から聞いたものを民話のかたちにつくったものであるという。

むかしむかし 日本の海の方こうに 元という国があつてな。…その国が海を渡つて日本に攻めてきた時のことじゃ。／敦賀湾に入り 松原に上陸しようと（中略）／松原の松の木にむらがる白さを大軍と見間違えてのこ

んな所へ上陸したんでは皆殺しにされると思い 反対にかじをとったそう。／東浦の江良の九頭龍谷（くろんた）という谷から現れた九つの頭を持つ龍に 行手を はばまれて 五幡に上陸したそう。／待ちかまえた大將武内の刀禰（すくね）が攻めまくり、敵の大將鉄輪（てつりん）を追つかけ岩のぐるりをまわる回数、／これはかなわんと 鉄輪の軍勢はかえる山に逃げ込み そこで首をはねられたそう。首をはねられた所を「首取り」と呼んで、村人はそこへ行くのを恐しがったんじゃ。それからしばらくして／暗いよさ¹⁵り 首取り坂で火が燃えているのを村人が見たそうだが 恐いので夜が明けてから見に行くとな。／火をもやしたあとに それは美しい旗が五本あり ひとつの色に輝いて立っていたそう。村人は村の宝じゃと言って やしろを建て「五幡大明神」と呼んで祭つたそう。それからは このあたりは五幡と呼ばれるようになった。

三・三 文献と口碑による考察

文献・口碑による伝説記述とその特徴

表一は三・一と三・二の資料を時代順に伝説の各事項を取り出してまとめたものである。

表一から文献の特徴を以下にまとめる。①「蒙古来攻伝説」時期は二通りあり、神話の領域ともいえる仲哀天皇時と年代の

表一 文献・口碑の伝説記述内容

	文献一 橘刀祢系図巻上	文献二 五幡有文書	文献三 氣比宮社記	文献四 越前古名考	文献五 越前志(抄)	文献六 敦賀郡神社誌	民話一 いつ色の旗	
1	文献年代	1556	1675	1764	1801	1801～1814	1933	
2	伝説年代	仲哀二年	聖武天皇之時 天平式捨年	昔日	古へ	仲哀天皇の 御宇	聖武天皇の御 宇	むかしむかし
3	異賊名称	三韓の蒙古	むくり(蒙 古)こくり (高句麗)	蒙古	蒙古	蒙古	蒙古	元
4	登場人物	仲哀天皇、神功皇后、 大伴武持、武内刀祢				武内大臣、 武帝	武内刀禰	武内刀禰
5	旗の記述	有	有	有	有	有	有	
6	白鷺の記述	有		有	有(松原)		有(松原)	
7	竜の記述	有					有	
8	雷鳴・光・震 動・黒雲など	雷鳴電光 不思議なる黒雲	震動雷電	五之瑞雲				
9	敵将名(鐵輪)	有				有	有	
10	伝説の事物名 記述	頸取り坂、頸取、追岩、 (おいぐり)、仏崎、常 宮谷、松が崎、九竜谷、 十石並、鞍掛石、常宮 権現船(岩)、門岩		鹿比流山	埴山	クビト(坂)、 榎石、埴山、 旗屋敷、オグ リ(追い岩)	旗屋敷、耳塚、 首取阪、追岩	九頭龍谷、か える山、首取 り(坂)、おっ かけ岩
11	旗による地名 神社由来	有(地名)	有(地名)	有(神社名)	有(地名)	有(地名)	有(神社名・ 地名)	有(地名)
12	文献・口碑の 立場	登場人物子孫により 家系図に筆記された もの	土地の人によ る地名由来 の記録	氣比神宮社 家(神官) による記録	学者による 古地名研究	学者による 地誌のうち の神社誌	敦賀地域の神 社誌	地元老人から の話を民話に したものの

確定できる聖武天皇時の天平二〇年。②旗による地名由来はすべてに記載。③【文献一】での事物名の多さと、その記述の特殊性。(文献二～四までは伝説の古跡名がほとんどなく、後年にはその数も収束。また文献一以外の記述は客観的)④基本的に伝説記述の通時的変遷があまり見られないこと。(内容展開、事物名がほぼ同じ)⑤文献一と口碑の類似性。

伝説の生成と継承の背景

これらの文献から、伝説の生成について考察する。右記のようにに他との違いが際立っているのは【文献一】である。各要素に分けた表一のうち、『橘刀祢系図』は他文献より登場人物や事物の固有名詞が際立ち、後者の数は十二にのぼる。またその伝説記述も長大で、記述のされ方も臨場感を伴い、他とは異なっている。この点に関して文献一の内容を見ると明らかに伝説が成長していることがわかる。杉原は「成長発展の著しい例は、敦賀市の蒙古来攻伝説である」(杉原一九七〇・三)と記している。それが表一によって裏付けられるのである。

その成長の背景には、この土地における橘刀祢と氣比神宮の関係がある。氣比神宮は上古より北陸道総鎮守と仰がれており、交通、産業、生活を守る神として崇められ、朝廷からの崇敬も特に篤かった¹⁴。武内刀祢は橘刀祢の先祖であり、代々氣比神宮を務めて敦賀湾一帯に絶大な権力を有していた(橘刀祢系図巻下)¹⁵。また文献には五幡と松原の二か所に白鷺が現れるが、そ

れは氣比神宮の象徴であり、特に氣比松原はその社領であった。田村克己は当伝説と氣比神との関係について、この地が外敵防衛の第一戦であり、その神の信仰が伝説にかかわっていたことを示唆している、と述べている(田村 一九九〇 三四六)。

当伝説の生成と発展、そして人々の語りには、氣比神宮の権威の上昇とともに、それと強い関係のあった地元の有名家の関与があったのではないか。文獻一の年代は弘治三年(一五五七)とあるが、杉原は、これは近世になってから書かれた可能性もあるとする¹⁶。また【文獻三】の筆者も氣比社の縁者であるが、同様な白鷺の記述に同社の威光が意図されている。このように考えた時文獻一の持つ特徴が理解される。赤坂憲雄は「記憶が文字のテキストとして記録されるときには、ある種の政治や権力の磁場が成立しているのではないか」(赤坂 二〇〇八 一〇四)と述べているが、口伝えされていたものが文字化された背景として、それは十分考えられる。同時に文獻一と口碑の類似は「磁場」の働いたテキストの影響を受けたことによるのかもしれない。また、【文獻四】の坂野二藏の「然レトモ此地ニ帰山・松原ノ名ハ実ニ古ヨリ有ケルニ、附会の説ヲツクルナラン」という考証は、伝説の生成誕生を言い当てている。

さらに同じ著者による【文獻五】では、伝承地で数名に実地の聞き書きがなされているが、当時この伝説が土地の人々により、現代とほぼ同じ形式で語り継がれていたことがわかる。

四 伝説の現在——聞き取りから

地元の方々からの話を記述し、伝説と人々との関わりとその現在とを考える。

四・一 地元の人たちの語り

【E氏】女性、一九四四年生まれ、五幡在住、地区外出身(一九七〇年代初めに福井市からこの地に嫁ぐ)

二〇一一年九月四日・二〇一四年三月三十一日聞き取り

(一)「追岩」

敵将を追い回したこの岩のことを地域の人は「えんぶり岩」と言っていたという。浜に幅四・五メートル、高さ三メートルくらい大きな岩があったが、四〇年ほど前、浜の改修工事時に崩されてしまった。今は小さくなっているが残っていると、現地に案内してくださった。国道と浜の間を探すがなかなか見つからず、かろうじてその間の岩石を推定された。「前はもう少し大きい岩があったのに、いつのまにかなくなってしまった」と嘆かれた。

次にE氏は、護岸工事以後に変わっていった海辺の景色を話した。工事前は岩場が多く、浜も狭かったため波しぶきが民家の上がっていた。

護岸工事と同時にテトラを入れ、岩もなくして砂浜を人工的に作ったんです。えんぶり岩も価値のあるものだと地元の人は思ってたし、あの時代は自然破壊すること平気でやっていたから。それはここ三〇四〇年の間の経済成長、どんどん壊して。あんな頃。

(二) 首取坂

【文献一】に記されているように、五幡と江良との境にある。現在では海沿いを国道が通っているが、その建設時に山を切り割ったような跡も見受けられる。その国道沿いから脇に入った場所が、地元の人からクビトと呼ばれている所である。

「首取り塚」が正式で、そこらへんでいっぱい捕えた蒙古の人たちを処刑した、って聞いています。だからクビト通ると夜はだめだよ、って。

E氏によると、埋葬や弔いをしなかったため地元の人は怖がり、あの辺は恐いから夕方暗くなってから通るな、ということをお嫁に来てから幾度も聞いたという。またクビト周辺道路では事故もよく起きたとのことである。

しかし、「お告げがあったから」と言ってそこへお堂を建てた人がいるという。「三十五年くらい前に、その地を借りてお店を始めた後、観音様のお告げがあり、そこを掘ったら湧水が出て

きたって。それで観音堂を建てて、その人たちの霊を今お祀りしてくださっているんです」。亡くなった異国の人たちは、それまでは弔いをされることは一度もなかったと話した。

E氏の語りから

文献に表れている事物名がほぼ同様に地元の人に継承されていることがわかるが、その一つが失われてしまった日本の民俗社会の変容も語られている。日本は一九六〇〜七〇年代に国土開発の波により変わり始め、海村に残っていた古跡も壊されていった。地元には伝えられていた伝説の足跡さえ、ダイナマイトで容赦なく吹き飛ばした時代であった。

【F氏】男性、一九二八年生まれ、地区外出身（一九七二年より江良で商売、現観音堂主）

二〇一一年十一月四日・二〇一二年四月二十八日・七月二十八日 聞き取り

(一) 首取の現在

E氏のお話からクビトと呼ばれている伝説の中心地にて、堂主を務めているF氏存在を知り、お話を伺った。F氏は五幡の隣村・江良で、蒙古来攻により外征に果てた兵士の霊を祀り、供養を行っている。

処刑場であったクビトの地は、現在「帰り山観音」と呼ばれ、

霊水とも言える湧水の地となっている。入口に「帰り山観音霊場」と彫られた塔が建てられ、その左手少し奥に水汲み場がある。水汲み場のさらに左は店舗と続く。木が生い茂った奥に入ると正面に観音堂、その右側に三メートルくらいの無縁塔と無縁塔縁起の碑が立っている。以下はF氏のライフストーリーである。

氏は一九四四年、十六歳の時に軍用船に乗り、南方への軍需物資の搬送に従事していた。ある日南方の軍事力増強のため、ソ連・満州国境の関東軍戦車部隊を釜山からフィリピンに転送する命令が出た。危険な就航ではあったが無事部隊輸送が遂行されて、マニラ港に停泊していたその時、空襲を受け、爆風により飛んできた物体で右の耳を強打し、海に放り出された。ようやく泳いで、岩にたどりついたが、満潮時になると、海面は胸までつかる高さになるという状況であった。七日七晩岩にしがみついていたが、出血と頭の激痛、高熱と、次第に意識が薄くなつていった。回りで皆力尽きていき、次は自分の番だと思っていたその時、眼の前に真白な観音様の姿が立ち現れた。それと同時にスコールが降り、雨水で命が助かったという。その後ようやく救助された。

帰国を果たしてその後、戦争体験により一九五三年から観音を信仰し始めたが、商売や事業はすべて成功した。このクビトには仕事上トラックでよく通っており、商売上適した場所だと目をつけて、一九七二年十月に地主へ借地を申し出た。当時の

ことをF氏は次のように話した。

地主さんにとっては（私は）二十三人目の（借地依頼）人やったけど、何故か快く貸してくれた。そのうち地主が「土地を買わないか」と言ってきた、土地を買うことになった。これは仏縁かもしれない、と思っている。

その地で観音を信仰しつつ商売を続けていたが、まもなく夢に観音が現れ「敷地内の）梅の木を掘ると甘露水が出る。それを多くの人に与えなさい」と告げた。その木の下を掘ると三十メートル下から水が吹き出たという。案内書には福井県衛生研究所の成分表も載せられている。その後この地に観音堂を建て、お盆に無名戦士の施餓鬼、秋に観音菩薩の御本尊祭を行っている。

（二）無縁塔の建立

氏によると、初めはその場所の由縁を知らなかった。しかし後にこの地が処刑場であることを知る。それはこの村（江良）や隣の村（五幡）の人に「クビトの人」と呼ばれたことによるという。地籍も「首取」であるため調べてもらったところ、「ここで昔モンゴルの人を処刑してバラバラにして…。だから首取りっていう」ことがわかった。奥さんも同じように呼ばれたため、訳を聞いたところ、同様な話を教えられた。彼女が聞いた

話によると、この付近には処刑された人の小さい墓がたくさんあったが、国道拡張時にじやまになり、向かいの山のふもとに移されたということであった。

この地の由縁がわかったとき、どのように思ったかお聞きしたところ、E氏は次のように答えた。

戦争行つて私たちの友だち、たくさんやられたでね。ここへ来たら、自分が戦争した体験があるで、国の隔たりはなしに、ね。蒙古の人をここで殺して何もせん草っばらにしておいて……。それではあかん、どうでも供養せなあかん、と。

異国の地に果てた兵士の霊を弔うため、無縁塔を建立した。その際僧侶から「供養していないから、ここには魂がたくさん浮いている。四十九日間供養しなさい」と言われたという。最後にF氏は「私らは観音様に使われている、という感じですよ」と語った。

以下は境内にある無縁塔縁起の碑文である。

：往時より地域住民はこの地を首取りと呼び 往來の静なる夜間は通行さえ怖れ敬遠していたものである。この地の由来については古代より語り継がれてきたつぎのような伝説がある。

頃は奈良朝人皇四十五代聖武帝の時世。天平二十年も霜月（七四八）この敦賀の浦に蒙古の軍船が攻め来たつたと^{マコ}言う。我が将兵の奮戦に首領鉄輪他多数の兵士をこの地に処刑しその首と胴をそれぞれ分ち埋めたと伝承される。

また近く五幡海岸には近年までおおぐり石またの名を追い岩と呼称された岩があった。かの鉄輪が上陸の際 武内刀祢なるものに追われ この岩を^{マコ}回ぐり逃げたとの口伝も残る。……

顧みるに今日迄の千数百星霜 誰をして遠き古代異国の地に果てた蒙古軍船無名戦士の墓に香華を手向けた者がいたであろうか。（中略）甘露の法水に併せて数多の古代国殉難無名戦士精霊の菩提を圓にせんとこそ（中略）依つて観世音菩薩の慈恩に酬いんがため茲に無縁の供養塔建立の発願に到つたのである。……

昭和六十五年十月吉日

帰り山観音堂

堂主……

この無縁塔の碑文はF氏の話を中心に、敦賀のある歴史家によって草案された。彼は元僧侶でこの地の霊水を飲んで体が良くなり、F氏の話に心を動かされ、当地に関心を持つようになった。古文書や歴史資料を調べて日参していたという。ここにも伝承と個人の関わりが見出せる。

F氏の語りから

F氏の行動のなかには、これまで人々に排除されてきたものをすくい取る行為が見られる。「どうしても供養せなあかん」「国の隔たりはなし」という言葉にそれが表われている。購入した土地が処刑場であった。しかし自身の戦争体験と兵士の姿が重なり、それまで放っておかれた異国の兵士の霊を弔うことになる。

戦争で九死に一生を得たこと、土地の購入と異人たちの供養、清水の湧出、すべて観音様の仏縁で繋がっていると語られていた。

【G氏】男性、一九二九年生まれ、江良（隣村）在住、同出身

二〇一四年四月四日・五月四日聞き取り

供養者の存在

F氏の奥さんは、首取やその付近に小さい墓がたくさんあったと話したが、G氏からも同じような話をお聞きした。しかし、G氏の話では墓ではなく、お地藏さんであった。

国道改修時に掘り起こしたら、村境の国道沿いに地藏さんがいっぱい出て来た。でも、全部頭が欠けている。だから村としては祀ったり弔いはしていないけれど、信仰のあ

る人が花をあげたり、祀り事をしていたのではないかと思う。それで、それらを国道向かいの山裾の木の下に移した。¹⁸⁾前はそこのお地藏さんに年寄りが前掛けを作ってお参りしていたが、みな高齢化してしまい、今はお地藏さんの上に折れた枝が乗っている。

G氏の語りから

G氏の話では伝説の中心地にあったものは首のないお地藏さんであり、F氏の奥さんの話では墓ということであった。一九六三年の国道改修時に移されたということは一致している。お地藏さんの年代についてはわからない¹⁹⁾。

E、F氏ともに兵士達の弔いをしなかった、という言い伝えを述べていたが、G氏の聞き取りから、供養を行っていた人々の存在がわかる。

【H氏】女性、一九五五年生まれ、江良在住、同出身、【文献一】の家系

二〇一四年五月二日・五月四日聞き取り

(一) お祖父さんのクビトの話

彼女はまず、お祖父さんからよく聞いた話をしてくださった。「クビトは森が茂っていて兵士たちが埋めてあるので、通る度怖かった。夜一人で歩いていると、何か辺りがザワザワして亡霊

が出てきた。それで、『出たらあかん、あかん』と言って追っ払った」

(二) 刀祢家と氏神社(日吉神社)

刀祢家の現在の当主は七十五代であるという。大化二年に先祖が氏神として祀った江良村の日吉神社とその祭礼行事について話をされた。

日吉神社は山王権現とも呼ばれ、当地の海を渡る千石船は、海から江良の山を仰ぎ、その山中にこの神社が見えると帆を下ろし、乗員は神社に向かって手を合わせ拜んだという。『江良浦刀祢由緒覚書写』には「江良氏神山王権現ハ我等ノ先祖ニ而御座候、古へ神いくさの時さんかんたいち(三韓退治)の後江良山権現と祝申ニ付、；寛文十一年(一六七二)敦賀郡 亥六月十日 江良刀祢…」とある。²¹⁾また、敦賀市内の氣比社領には江良川という川があると話された。

H氏の語りから

彼女の語りから、江良村の刀祢家は、昔蒙古来攻で活躍したその先祖により伝説地一帯、特に敦賀湾において絶大な権力を有していたことがわかる。そして口碑と同様、お祖父さんの話からは、処刑地・クビトは、勝者の後裔さえも通るのが恐ろしい場所であった。

四・一 地元の人の語りからの考察

伝説の中心地は地域の人々に怖れられ、伝説は本当にあったことと信じられていた。またG氏の話から、兵士達の鎮魂を行っていた人々のいたことが明らかとなった。現代の人々から忘れ去られ埋もれていたお地藏さんから、昔の人たちの心情が窺われる。そこには文献や口碑には表れない地元の人々の心―たとえ異賊であつても死を悼む心―を見ることが出来る。F氏の行動は、それをさらに具現化したものであると言える。

しかし、多くの伝説の足場が消えていった。クビト周辺にあつた首のない地藏群は一九六三年に国道改修工事で別の場所に移され、「追岩」は一九七四年の防波堤工事で壊された。その時期はいずれも日本の高度成長期と一致しており、伝承の跡は当時価値が顧みられなかった。

五 おわりに

文献と聞き取りから伝説の変移とその背景、人と伝説とのかわり、また伝説の現在をまとめる。「蒙古来攻伝説」は、大陸交通の要衝地が有する二面性、すなわち、時を定めず渡り来る対岸の人々に対する「欲待と忌避」(浅香 一九八七 二八九)の思いを併せ持つ、という土地柄故に生まれた。防御を託された神社の地位の上昇と地元で功名のあつた家系によって「成長

「発展」し、ピークを迎えた時期があった。しかし人々は伝説について、より素朴に、敵将を追い回した追岩、その首を取った坂、処刑地クビトなどを主要な事物として選び受け入れ、伝えてきた。

地域の人にとって、処刑地は無名兵士たちを排除したその結果としての、「異界」であった。それは地域の人から恐れがられ、「異人の埋葬地」という、いわば「異人、異類の住むところの連想」(坂本一九九七 二二〇～二二一)につながっている。民話や語りが表わす「恐ろしがったんじや」「クビト通ると夜はだめだよ」などのように、恐怖を伴うその場が伝説と地元の人を結び結節点となっていたのではないだろうか。すなわち、地域の人々が、口伝えに耳にしたり、文字を追ったりしたこの伝説に關して、それが事実、歴史であると認識するのに十分な場が処刑地であった。そこは日々の暮らしの外にあるが、恐怖を伴うがゆえに伝説が想起される場であり、人々に蒙古と戦ったということが実感をもってとらえられる場であったと言える。

そして語りから、過去にある人々が異国に散った兵士たちのために地蔵を造り、花を手向けていたことが明らかとなった。「異界」に放置された屍は、共同体で祀られた形跡は見当たらないが、過去に弔いを受けていたのである。

しかし、記憶の跡は一九六〇～七〇年代の国土開発時に意味を与えられず、その時期に衰退期を迎えていた。そのようななか、伝説の中心地に入ったある由縁者によって、衰えてきた伝

説がよみがえり、息を吹き返した。信仰を伴った不思議な話が伝説に付加され、地元の人のみならず、水を求めてやって来る人々がその地にある碑文などにより、歴史や言い伝えを改めて知ることになる。伝説の現在を見ると、新しく再生創造され、その空間も広がっていることがわかる。当伝説は生成→成長発展→衰退→再生再興という流れを経ていると言えるだろう。

「蒙古来攻」伝説はその根を下ろした風土、時代、社会背景のなかで、「個々人の次元」(湯川 一九九八 十五～二十五)とこの思いによって形作られ、現在も時代とともに変容しつつそこに存在している。

また、その時代の個々人の心情や行為は文献、口碑などに表れず、ある物によって語られるときがあることも見受けられる。そして当伝説の現在を見ると、それはときに人の人生を変える力も持っているということも確認できるのである。

引用参考文献

赤坂憲雄他編『歴史と記憶―場所・身体・時間』二〇〇八 藤原書店

浅香年木『日本社会における日本海地域』『日本の社会史』第一巻 一九八七 岩波書店

浅井善太郎『東浦公民館報 文化財特集』第二『東浦村誌資料』一九五六 東浦公民館

石井左近編『敦賀郡神社誌』一九三三 福井縣神職會敦賀郡支

部

五幡区史編集刊行委員会『五幡区史―私たちのふるさと五幡―』

二〇二二

五幡区史編集刊行委員会『五幡の今昔』二〇〇五 五幡区

大矢眞一編『分類・福井縣傳説集』『南越民俗』第二卷

一九三九

岡正雄『異人その他』「一九二九」一九七五 言叢社

川久保幸輝『江良今昔』一九九一 私家本

門脇貞二『日本海域の古代史』一九八六 東京大学出版

官幣大社氣比神宮『氣比宮社記』「一九三二」一九四〇 官幣大

社氣比神宮

小池淳一「伝承論への展望―口承文芸のむかし・民俗研究のこ

れから―」『日本民俗学』第二二六号 一九九八

小松和彦編『日本人の異界観』二〇〇六 せりか書房

坂本要「他界観と民俗」赤田光男・小松和彦編『講座日本の民

俗学』七（神と靈魂の民俗）一九九七 雄山閣出版

杉原丈夫編『越前若狭の伝説』一九七〇 松見文庫

杉原丈夫編『越前若狭地誌叢書 続巻』一九七七 松見文庫

田村克己「気多・氣比の神―海から来るものの神話―」『海と

列島文化』第一巻 一九九〇 小学館

敦賀市史編さん委員会『敦賀市史資料編』第四巻上 一九八二

敦賀市役所

敦賀市史編さん委員会『敦賀市史通史編』上巻 一九八五 敦

賀市役所

東浦公民館編『東浦の民話集』一九七六～七七 東浦公民館

福井県編『福井県史通史編』3 一九九四 福井県

柳田國男『民間伝承論』「一九三四」『柳田國男全集』第八卷

一九九八 筑摩書房

柳田國男『日本伝説名彙』「一九五〇」一九七一 日本放送出版

協会

吉見俊也『シリーズ日本近現代史』⑨（ポスト戦後社会）

二〇〇九 岩波書店

山口昌男『文化と両義性』一九七五 岩波書店

湯川洋司「伝承母体論とムラの現在」『日本民俗学』第二二六号

一九九八

注

(1) 『日本書紀』垂仁天皇二年是歲。

(2) 出典は大矢眞一編『分類・福井縣傳説集』『南越民俗』二

(一九三九 九)である。柳田が引用するに当たり、文体

を変えている。大本の典拠は『敦賀郡神社誌』（石井左近

編一九三三）。三〇年代の伝説文字化において、直接引用

がとられていない例が複数見られる。

(3) <http://www.hyogo-jinjacho.com/data/6309005.html>

二〇一四年七月二十八日取得

(4) 福井県の伝説三三〇〇編を収録。「県下の伝説の大半を取

録し得たものと信じる」(杉原一九七〇 五)

(5) 敦賀市東浦公民館での聞き取り。二〇一四年二月二十八日

(6) 注(2)参照。

(7) 「境」とあるが、伝説の戦いの場合は「五幡」に位置し、伝説内の処刑地・「頸取坂」・「頸頭」は隣村の「江良」に位置していることを指す。よって当伝説は村の境界で起こったことを意味する。

(8) 出典『敦賀市史 資料編第四卷上』(敦賀市史編纂委員会一九八二)

(9) 出典 官幣大社氣比神宮編 一九四〇

(10) 出典 杉原丈夫編 『越前若狭地誌叢書 続巻』一九七七

(11) 出典は杉原同書。

(12) 比較的まとまった作者の記事を抄録し、編者が増補として附記。(杉原 一九七七)

(13) 真夜中のこと。

(14) 「氣比神宮 御由緒・参拝案内」二〇一三 氣比神宮社務所

(15) 刀祢家は大化元年に江良の地に移住した。

(16) 文体や内容から見て中世以前のものとは考えられない(杉原 一九七〇 二三)。

(17) 氏は二〇一四年二月十六日に死去された。

(18) 地図一参照。矢印が移設された場所。現在の地藏数は十五体程だが、以前はもっと多かった。(盗難によるという)

(19) 鑑定もされずに移されたと思われる。

(20) 地図一参照。

(21) 出典 敦賀市史編纂委員会「刀祢春次郎文書」『敦賀市史 資料編第四卷上』一九八二

(22) 「異界」とは「人びとの日常世界・日常生活の外側にある」と考えられている世界・領域のこと(小松 二〇〇六 五一六)。

〈付記〉

本研究にあたり、敦賀市五幡、江良の皆様には、聞き取り調査及び資料の御提供等で多大な御協力を賜りました。記して御礼申し上げます。

(しおせ・ひろこ)名古屋大学大学院